2025年10月5日（聖霊降臨後第17主日・特定22、C年）
メッセージ
「一粒の、愛ある信仰」
（ルカによる福音書17:5-10）

司祭ヨセフ太田信三

イエスは大きくなることよりも、小さくあることを大事にし、小さな命の営みを慈しまれました。今日の福音書で、使徒たちは「信仰を増してください」と、自分たちの信仰が「大きくなる」ことを求めています。しかしイエスは、信仰はからし種ほどで十分だと言われます。

大事なことは、「愛」があるかどうかです。パウロは、コリントの信徒への手紙Ⅰ13：2で「たとえ山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。」と言っています。使徒たちがいくら「大きな」信仰を持っていても、そこに愛がなければ意味がない。愛ある真の信仰ならば、からし種ほどの小ささでも十分だ、とイエスは使徒たちに伝えたのです。

今日の福音の後半部分では、クリスチャンには求められていることが記されています。それは、当然のこととして主人に仕え、見返りを求めず、しなければならないことをすることです。しかし、ルカによる福音書12:37には全く逆の記述があります。「はっきり言っておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。」この矛盾したような記述が何故あるのかと考えると、やはりクリスチャンの働きとは、主人である神からの愛への応答なのだ、ということなのです。

まず神が私たちを迎え、もてなし、給仕してくださる。そうして神の愛を感じるからこそ、私たちは感謝と喜びのうちに神に仕えて生きる心が与えられます。その愛が究極的に示された出来事こそ、十字架の死と復活です。主イエス自らが十字架上でもっとも弱く、小さくされた存在として命をささげてくださった。そのたった一つの命を神は復活させた。ここにたった一つの、小さな命へ注がれる神の大きな愛が示されました。そして、そこに示された大きな愛を知ることでこそ、私たちの内にも小さな命を慈しむ心が与えられます。愛ある信仰とは、イエスを通して示された神の大きな愛をいただくからこそ、私たちに宿るのです。

からし種一つの愛ある信仰さえあれば、そこに神からの大きな力が注がれます。イエスの十字架と復活という、たった一つの命がすべての命の救いの源となった出来事が、そのことを証ししています。大きなものに気を奪われ、小さなものへの眼差しを失うことがないように。からし種ほどで十分。神の愛の欠片をいただき、愛ある信仰を持って生きることができますように。